

アシウアザミとジャクエツアザミ(新称) (植物地理分類学会61周年によせて)

著者	門田 裕一
著者別表示	Kadota Yuichi
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	60
号	1
ページ	5-10
発行年	2012-12-01
URL	http://doi.org/10.24517/00053475



60周年記念講演要旨

門田 裕一：アシウアザミとジャクエツアザミ（新称）

国立科学博物館植物研究部

Yuichi Kadota: Taxonomic notes on *Cirsium ashuense* and *Cirsium takaoi* (nom. prov.) (Asteraceae)

Department of Botany, National Museum of Nature and Science (former National Science Museum, Tokyo),
4-1-1, Amakubo, Tsukuba, 305-0005 JAPAN

2012年6月1日の植物地理・分類学会50周年記念講演会ではオミナエシ科のオオキンレイカやキク科トウヒレン属のワカサトウヒレンなどについても紹介したが、ここでは日本産アザミ属の分類学的研究の一環としてアシウアザミとそれに関連したアザ

ミについて取り上げることにしたい。

アシウアザミ

アシウアザミ *Cirsium ashuense* S. Yokoy. & T. Shimizu (図1) は本誌44巻1号(1996)に新種と



図1. アシウアザミとその頭花. 京都府南丹市京都大学芦生研究林櫃倉谷産.

して発表されたアザミである。京都府南丹市の京都大学芦生演習林に生育するアザミの研究過程で、形態的にカガノアザミに似ているものの、染色体数のレベルでそれとは異なるものが見出されたことが発端とされた (Yokoyama et al. 1996)。すなわち、カガノアザミが $2n = 34$ の二倍体種であるのに対して、このアザミは $2n = 68$ の四倍体種であることが分かったのである。形態的には、アシウアザミはカガノアザミから、総苞が鐘状筒形 (より太い)、腺体が狭披針形～線形とより細長いことその他、小花、総苞片先端の刺の長さ、瘦果の長さでも区別できるとされた。

アシウアザミは確かに実在する種であると考えられる。決して珍しい植物ではなく、芦生演習林内のあちこちや、周辺地域 (例えば、京都府と福井県境の堀越峠など) に大きな群落を形成している。高さ 2 m になることも珍しくない大型のアザミで、カガノアザミよりも豪壮な感じがする。カガノアザミと同じように長い柄の先に頭花を點頭させるが、頭花の柄の長さには変異があり、2-3 cm になることもある。しかし、実際にはこの地域にはカガノアザミは少ないので、ほっそりした筒形の総苞をもつアザミを見たらアシウアザミと思って間違いない。アシウアザミもカガノアザミと同じように水湿の地を好むが、アシウアザミの方がやや乾いたところを好むように思われる。肥沃な土地を好むことは両種に共通している。アシウアザミの分布域については後述する。

総苞片の列数

アシウアザミの原記載では、総苞片は 7-8 列と記載されている。キク科植物で総苞片が多列になるものにおいて、列数は螺旋状に数える。しかし、この方法では総苞を実際に手に取ることによってしか数えることができない。台紙にマウントされた標本や画像でも数えることのできる方法が必要である。この方法については既に触れた (門田 2008, 2010, 2012a) が、ここでアシウアザミを材料としてもう一度紹介したい。アザミ属の分類において、とくに近縁な種群での種の認識では総苞片の列数の違いが有効と考えられるからである。因みに、同じくキク科のトウヒレン属でも総苞片の列数は種の認識に有効であることが分かっている (門田 2012b)。

図1は京都大学芦生演習林・櫃倉谷産アシウアザミである。図2に総苞片の数え方を示した。まず起点となる総苞最外片を決め、それを第一列とする。次にそれに隣り合って、かつ内側に位置する総苞片を第二列とする。これを繰り返すのであるが、注意することが二点ある。一つは、最外片と苞葉を取り

違えないことである。苞葉は総苞片と大きさや形が異なるので区別できるだろう。生時には彩りも違うので区別は容易ではないと思われる。二つ目は、最内片も忘れずに列数に入れることである。最内片は紫色を帯びることが多い。このように数えると、アシウアザミの総苞片は 8-9 列となる。「8-9」と幅をもたせて表記するのは変異があるためでもあるが、むしろ起点のとり方で列数が変わることがあるからである。キク科の総苞片の列数はこのように数えることを改めて提起したい。

ジャクエツアザミ (新称)

Yokoyama et al. (1996) はカガノアザミとの比較において、アシウアザミを認識したことは先述したとおりである。実際のところ、両者は染色体数の倍数レベルが異なるため、別の種群 (異なる亜節) の実体として認識されるべきものである。

アシウアザミが発表されたちょうどその頃、私も北陸地方産アザミ属の研究に取り組んでいた。これは若杉孝生氏 (福井総合植物園) との共同研究であった。後になって、写真家の宮誠而氏 (加賀市) が合流することになる。

日本列島ではアザミ属は、水平的には北方領土から南西諸島まで、垂直的には海岸の波打ち際から高山の頂まで、ほぼ全土に広く分布している。私の見解では 100 種以上が認められるが、それらは広分布種と狭分布種の二群に大別される。分類が難しいといわれる種は皆広分布種である。具体的には、北海道のチシマアザミ (実際には真のチシマアザミは少なく、コバナアザミが多い; 門田 2008, 2012a)、東北地方のナンブアザミ (門田 2010)、関東・中部地方のトネアザミ (タイアザミ)、近畿地方～中国地方及び四国のヨシノアザミ、九州のツクシアザミである。これらの種はそれぞれの地域での普通種であるが、形態的変異の幅が広いため、分類が難しい。これらの広分布種は、分布域の中心部で典型を認めることは比較的容易であるが、分布域の周辺部では近縁な他の種との区別が困難になる場合が多い。これらはいずれも、花期に根生葉が生存しない、頭花が點頭する四倍体種群であるが、頭花が直立して咲く別の四倍体種群のアザミがある (例えば、門田 2010 など)。低地に分布し、花期に根生葉が生存せず、頭花が直立するアザミについては研究が遅れており、日本各地に未記載の種があるようだ。

話を北陸地方に戻す。北陸地方はヨシノアザミとナンブアザミの境界域に当たっている。ナンブアザミは秋田県から南下して富山県に達している。福井県は日本海側でのヨシノアザミの東限に当たり、分布域は福井市に及んでいる。ナンブアザミとヨシノ



図2. アシウアザミの総苞片の列数 (図1と同一の個体). 総苞片は8-9列と数えられる.

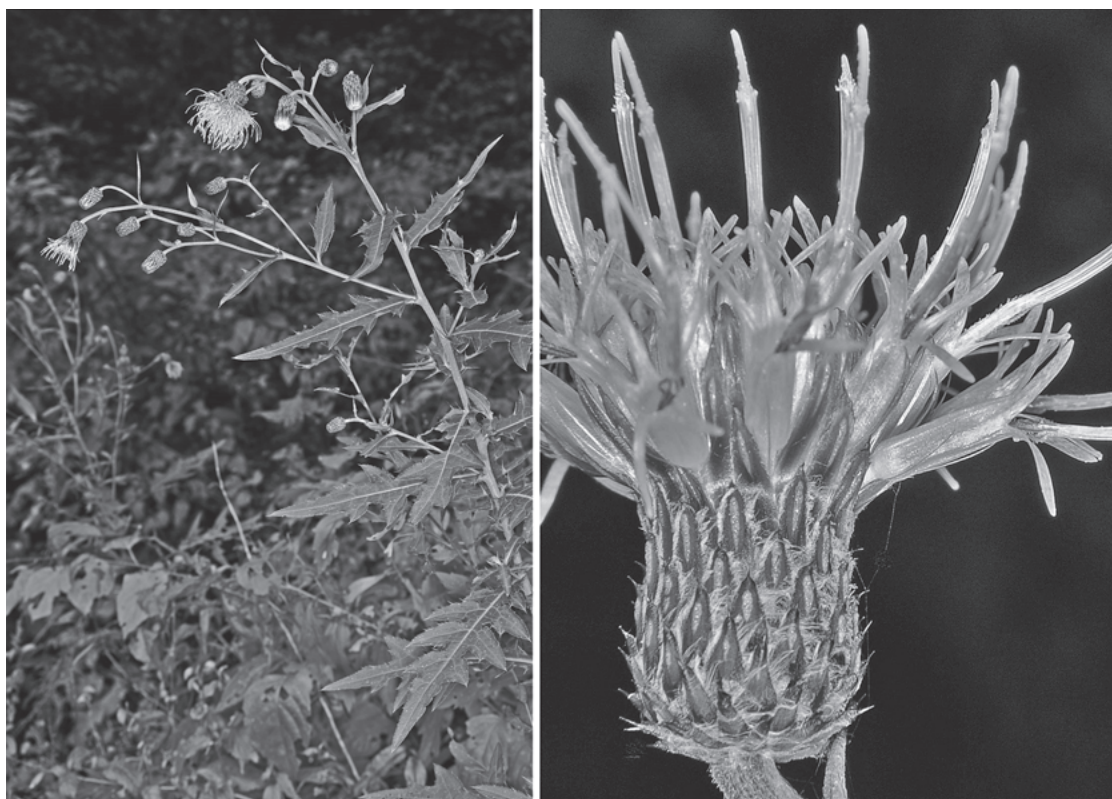


図3. ジャクエツアザミ（新称）とその頭花。福井県敦賀市池河内産。総苞片の中肋に、長楕円形～倒卵状長楕円形で良く発達した腺体が認められる。

アザミの分布域の間を埋めるかたちでハクサンアザミが分布する。ナンブアザミとヨシノアザミは総苞片が8-9列、ハクサンアザミは6列である。

北陸地方におけるアザミ属の詳細な分布状況を把握するために調査を行なっているうちに、総苞片が多いことが肉眼でも容易に確かめられるアザミが生育することに気が付いた。総苞片が11-12列あるのである。最初、福井県若狭地方で気が付き、その後越前地方にも普通に分布することが分かった。若狭地方と越前地方に広く出現することから、ジャクエツアザミ（若越薊）と呼ぶことにした（図3）。ジャクエツアザミはヨシノアザミに似てやや太い筒形の総苞をもつが、総苞片は短く反曲する。決定的な違いは総苞片が11-12列あることである（図4）。ジャクエツアザミの基準産地は福井県敦賀市池河内とし、分布域は富山県から兵庫県に及ぶ地域と把握している。Yokoyama et al. (1996) はアシウアザミの分布域が京都府と滋賀県北部の他、福井県に広く分布するとしている。現地調査の結果、アシウアザミは京都府、滋賀県、福井県の県境山地とその付近に限られ、その他の地域にはジャクエツアザミが分布すると私たちは考えている。即ち、福井県を例に

とると、上述の三府県の境界域のより高所にアシウアザミが分布し、その他の低所にはジャクエツアザミが広く分布するということになる。しかしながら、Yokoyama et al. (1996) が引用した標本の調査をまだ行っていないので、その調査を済ませた上でジャクエツアザミの正式発表を行いたい。

ジャクエツアザミの存在に気が付いてから実に20年が経過した。正式発表が遅れた主な理由は、中国地方の西部にジャクエツアザミによく似たアザミが分布しており、それとの区別が問題であったためである。この問題にも一応の決着をつけることができた。このアザミはトゲナシアザミ *Cirsium indefensum* Kitam. であることが分かった。近畿地方から分布するヨシノアザミは広島県中部を西限とし、これより西に普通に分布するのはトゲナシアザミである。なお、和名のトゲナシアザミはこの種の実態を反映していないので、基準産地に因んで、イズモアザミという新和名を提唱することを考えている。

終わりにあたって

分類が難しいとされた日本産アザミ属に取り組ん

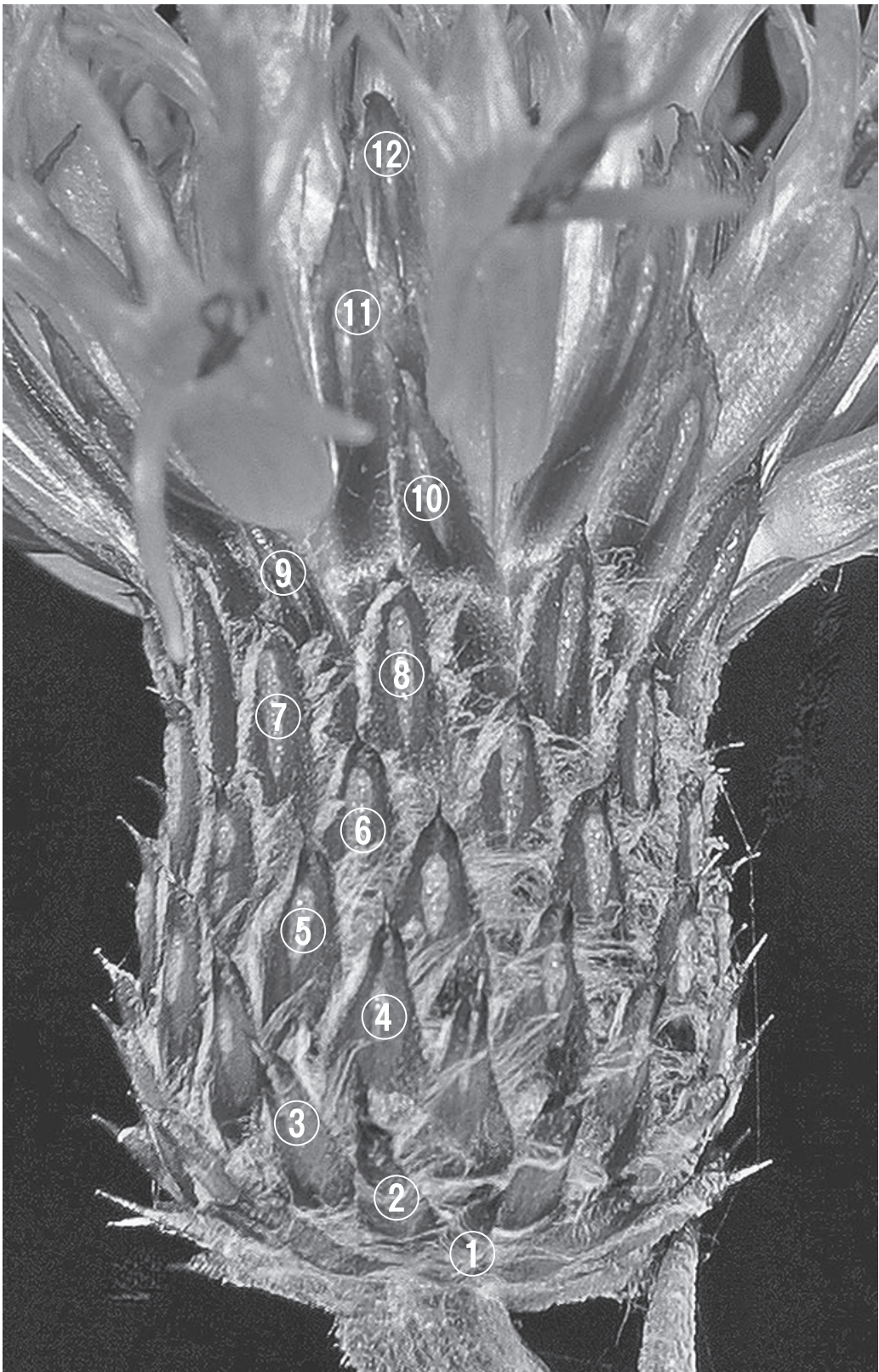


図4. ジャクエツアザミ (新称) の総苞片の列数 (図3と同一の個体). 総苞片は11-12列と数えられる.

で25年が経過した。私のアザミ研究は北陸地方から始まったのだが、日本全土での調査・研究を一応終えて、改めて北陸地方のアザミ属分類は難しいと思う。とくに、福井県と岐阜県の県境域を中心に分布するアザミが難しい。これは本州の東部と西部の接点になっているからではないだろうか。一旦地理的分化（一次的種分化）を遂げた種がこの地域で接触し、二次的種分化（雑種種分化）が起こっているのかもしれない。しかしながら、現時点では二次的種分化を論議できるようなデータは全く不十分である。アザミ属では著しい地理的な分化を遂げた種群があり、それらを解析することによって、北陸地方の地域性が浮かび上がってくるものと期待されたが、やはり一筋縄ではいかないようだ。

引用文献

- 門田裕一. 2008. エゾヤマアザミとエゾノサワアザミ. 北方山草 (25) : 45-55.
- 門田裕一. 2010. 東北地方のアザミーナンブアザミを巡る問題点— 分類 (10) : 15-21.
- 門田裕一. 2012a. 北海道産植物ノート (3) 根室半島のアザミたち. 北方山草 (29) : 69-78.
- 門田裕一. 2012b. 福島県産トウヒレン属とコウモリソウ属 (キク科) 植物に関するノート. フロラ福島 (28) : 1-11.

追記

2012年10月、アシウアザミの現状を観察するために、その撮影も兼ねて、京都大学芦生演習林を再訪した。この調査には本文中に出てくるカメラマンの宮誠而氏も同行された。実に20年ぶりの訪問で

あった。芦生演習林は「京都大学フィールド科学教育研究センター 森林センター 芦生研究林」と名前を変えていた。どことなく、植生の密度が低くなったような気がした。森が明るくなっているのだ。

演習林内での自動車通行の許可は前もって申請していなかったで、入口に駐車して徒歩で調査を行うことになった。先ず、以前大きな群落を見ていた櫃倉谷へ向かった。ところが、驚いたことに、アシウアザミの姿は全く見られないのだ。徒歩で調べまわったので、まず見落としは考えにくい。櫃倉谷の林道終点まで向かったが結局一株も見ることができなかった。以前は林道に沿っていたところに普通に見られたのだが…

その後内杉谷方面にも向かったがやはりアシウアザミの姿は見えない。徒歩ではあまりにも効率が悪く、別の予定もかかえていたので、この日はこれのうち切ることにした。

後日、宮氏に滋賀県から芦生研究林に入っていた。この時も研究林の内部ではアシウアザミが一株も見当たらなかったとのことである。アザミ図鑑のために必要な画像は高島市朽木途中谷のものを使用することにした。

それにしてもアシウアザミはどうなってしまったのだろうか？20年前は探すまでもなく、いたるところに生育しているのを実際に見ている。アシウアザミの比較の対象とされた、カガノアザミとその近縁種のアザミ属二倍体種群ではいくつかの種において、10年で群落が消滅していくのを確認している。四倍体種であるアシウアザミも同じ途をたどり、消滅してしまったのだろうか？